『比較民俗研究』15. 1997／6

ナシ族のレバ踊りに関する一考察

戈　阿干（ゴアガン）※

ナシ族のトンバ（祭司）より保存し伝わってきたトンバ舞譜（踊りのテキスト）及びトンバ踊りは早くから国際芸能界によく知られていた。近年には，麗江県塔城郷等でナシ族の民間芸能人より伝承されているレバ踊りも次第に注目され，雲南省以外の所にも評判が高くなってきたようである。この踊りに関しては前からある人に調査され，チベットの踊りだと言われたことがるが，1995年筆者は麗江県人民政府に招かれて『トンバ舞譜及びトンバ踊り』等の文化資料の映像を撮るプロジクタに参加する際に，しばしばトンバ踊りとレバ踊りとの間に繋がりが存在する事を民間の芸能人より紹介してもらって，ようやくレバ踊りもナシ族のもう一つの珍しい踊りに関する文化財である事が承知した。4か月間半の撮影する期間に，トンバ舞譜及びトンバ踊りとの接触以外に，筆者はレバ踊りを始め，色々な芸能の場面を楽めた。それに，レバ踊りの芸能人の李文義と李文光，和文光，和学忠ら四人にレバ踊りに関わる問題をよく聞いてもらった。『トンバ舞譜及びトンバ踊り』の撮影が終ってから，筆者は当時の麗江県文化局の局長の和文筆氏と一緒に塔城郷へレバ踊りの現状を調査するチャンスに恵まれた。この調査を通して，筆者はもっとレバ踊りの面目とその文化的意義の了解と理解を深めた。以下にはナシ族のレバ踊りの保存及び伝わっている地域，レバ踊りの演出隊，及びその伝承についての古俗，レバ踊りに融合している数多くの踊り，レバ踊とトンバ踊りとの関係，レバ踊りとチベット仏教のガマガギョ派との歴史機縁，レバ踊りの独特の文化価値等に関する考察結果と筆者個人の考えを合わせて述べたいである。

一，ナシ族のレバ踊りの伝承地域

現在，レバ踊りは雲南省麗江ナシ族自治県においては羅固チベット族行政村以外の塔城郷金境と巨甸郷下亨土，大城蓮，古渡などの自然村及び魯甸郷甸東自然村で伝承している，雲南省維西リス族自治県においては塔城郷境内の一切ナシ族の村で伝承している（その塔城郷には六つのチベット族村があり，その中の二つの村もレバ踊りを踊り始めた）雲南省迪慶チベット族自治州中甸県においては上江村で伝承している（この村は金沙江を隔てて麗江県塔城郷を望み）。

以上の地域は雲南省北部の金沙江峡谷地帯に位置し，麗江と維西と徳欽と中甸四つの県の交界地で，ナシ族とチベット族の雑居地である。昔，このあたりには交通が不便で，高山と大川で外の世界とよく離れていた。塔城郷か麗江の町にかけては五，六日間歩かなければならなかった。今まで，数多くの村と村の間には車が通らない状態である。このような交通不便な所に位置しているわけで，このありの伝統文化はまた完整に保存しており，現代文明にあまり衝撃れてないよ

※雲南省民間文芸家協会研究員

うだ。

レバ踊りの分布地域を観察して見つかったのはつぎの現象である。以前，ある人はレバ踊りはチベット族のもんだと言われたけど，おもしろいのは世世代代でレバ踊りを伝承してきたのはナシ族で，チベット族ではないことである。譬え，麗江県塔城郷のナシ族の村は皆レバ踊りを踊る伝統儀礼があるけど，塔城郷に属す羅固チベット属行政政府村だけぜんぜんレバ踊りを踊ったことがないである。維西県塔城郷と中甸県上江地方のいくつかのチベット属の村にはレバ踊りを踊るが，地元の人によると，彼らはナシ族からレバ踊りを習ってもらったとのことである。もし，レバ踊りは元元チベット族の踊りなら，反対に，ナシ族から学んでもらう必要性がないだろう？これについては以下の論述に譲ろう。

二，レバ踊りの演出隊とその伝承古俗

常に，一つのレバ踊りの演出隊は一つの村，或鄰接のいくつかの村より結成される。一般には，演出隊は年ごとに一度しか踊らなく，そして，踊る時間はお正月に限定されている。ある時，村には人間と畜性などの病災を始め，大規模な災難が発生し，例外にして，レバ踊りを踊る事もあるようである。ナシ俗の概念の中では，この踊りを踊るのは楽しめるためだけでなく，主な目的は神をお招いて悪魔を鎮め，平安と康楽の年を求めることである。

演出隊の組織は厳しくて，ツオブと言う芸能者より舞隊を率いて踊り，彼は踊りの達者で，村人に尊敬される者しなければならない。この人は別の三人の踊り手と一緒に決まれた芸名とその順番があり，即ルオブ，アラグギ，ニュバダソ，ドニュアバとの芸名と順番である。村人はこの四人が四人の男神を代表すると考えている。彼らに対応して，女性の踊り手も四人があり，即ドュッハイラム，ボドミイラム，オヘュルイラム，ツベヨチョラムで，やはり，四人の女神を代表する。この八人の踊り手の後には年齢の順番でだれとも踊り輪に参加できて，六十，七十才の年寄りから五，六才の子供までけっこう，往往に一軒の三つの世代の家属とも踊り輪に参加することがよく見られる。

踊り場はある広い庭がある家庭を選ぶ。踊る前の数日に前もって，占いし，踊りの日にちを決める。その日にちは必ず吉日しなければいけない。それに，その年の属相はその家庭主の属相と撞らないように注意すべき。

ネンバと言う主催者より踊るに関わる事務を担當する。彼の主な任務は次ぎである。

1，照明用の薪を用意すること（古い薪は使えない）；2，演出隊のために食糧と肉などを用意すること；3，演出隊より村人を招待して食事すること。

踊り場は庭の中に設置する。正面には二本の松の木を立てて神樹にする。その神樹は「ズカンタンツ」，或「クシトツ」とも呼ぶ。その前には供え机が置き，その上に線香を燃し，油燈を火付ける。神樹の上にチベット仏教のガマガギョ派の教祖とするガマバを絵が描かれている樹軸を掛け，またこの教派の別の菩薩と神の画像を掛る。それに観音と仏陀の画像を掛る場合もある。庭の真中には松の葉とサヅキの葉と枝を燃し，踊るところに，人々はその上に来か，いりこかを

撒き，神に尊敬な意を表す。

正式に踊る前にまた恐しい顔する假面をかぶって，怪しい身振りする一人が出てきて，踊り場の秩序を維持する。この人は「アンツライ」，或「ギョゴアンツライ」と呼ぶ。ギュゴはイントを指す（ナシ族のトンバはギュゴはイントよりもっと遠い所を指すとも言う）ので，この人もインドの人のように化汝すべき。

踊り手の服飾はチベットぽいで，男性は白いシャツを着て，その上には赤色のひとえの長い着物をかけ，頭には毛せんの帽子をかぶる上に赤色の毛線を巻き，肩には二つの大きい花をかけ，足には皮で作った長い靴をはく。女性の場合，毛織のベストを着用し，五色の毛線で頭を巻き，背中には一つの花をかける。

主な道具は太鼓と男性用の振りつづと女性の長い握りの「レバ太鼓」とそれを叩く用の太鼓ばちと男性が左手に持つ白いヤクの尾である。

三，レバ踊りに含まれる踊りの種類

カツライより踊り場の秩序を整頓した後，表門の内側に集っている踊り手が神を迎える歌を歌う。ついにツオブと呼ぶ踊り隊を率いる者より太鼓を叩き，別の踊り手はそのリズムに従って登場してくる。つぎには順番で以下の踊りを踊る：

1，ウォギツォ	象があるく踊り；
2，ロギツオ	龍が歩く踊り；
3，ラツォ	虎が歩く踊り。民間には「ラツォツォアメ」と言う俗語があり，その意味は「虎の踊りは踊りの元」で，レバ踊りの各踊の間にはよく虎の踊りを踊る；
4，ゲナダ	鷹の踊り；
5，バツォ	蛙の踊り；
6，ラツォペダ	虎の身振りで麻布を織る踊り；
7，ヒュキョツォ	大鵬鳥の踊り；
8，マイツォ	金色の孔雀の踊り；
9，ツゥアツォ	鹿の踊り；
10，バンツォ	ヤクの踊り；
11，ルツォ	馬の踊り；
12，ギムヅドュツォ	とんぼが水づける踊り；
13，ニルツゥアトツォ	足を（二回）挙げて（六歩）歩く踊り；
14，ギョビツォ	かさかさが飛ぶ踊り；
15，プルゴツォ	体と尻のツイスト踊り；
16，アンプククツォ	闘鶏の踊り；
17，マンヨサンパツォ	ししの尾が揺る踊り；

18，ニルサトツォ　　足を（二回）挙げて（七歩）歩く踊り；
19，マニラツォ　　六字真言の踊り；
20，ニルグトツォ　　足を（二回）挙げて（九歩）歩く踊り；
21，タグゴラツォ　　太鼓を叩く踊り；
22，バンルケソス　　蠅が足を揉む踊り；
23，マンヨギツォ　　ししの尾が土に投げる踊り；
24，レガズツォ　　鳥の踊り；
25，トンバツォ　　トンバ踊り（一方の踊り，三方の踊り，四方の踊り，六方の踊り）；
26，ズアンズアンツォ　（イゥ＝ツォ）ツイス踊り；
27，レバアン　　道を分ける踊り（虎の歩法による踊る隊を分ける）；
28，アラグヨツ　　二番目の踊り率いる者は一人で歌を歌いながら，単獨に踊る踊り；
29，アラグギツァン　　二番目の踊り率いる者が一人の男の子を肩てまたらせて単獨に踊る踊り；
30，プパドュタンツォ　まいきねを踊る踊り（まいぎねの棚を跳び出す踊り，姿勢は猿の身振り）；
31，太陽を参拝する踊り（月と星も参拝する）；
32，プラブツォ　　神をみ送る踊り。

以上の三十二種類の踊りの名前の中には十九と三十一がチベット語を借用する以外，皆ナシ語である。これらの踊りを全部踊り尽すなら，十時間ぐらい必要で，通常は當田の晩ご飯の後から翌日の曙まで踊る。この過程の中で一つかいくつかのはげしい踊りが終ると，必ず安らぎで緩やかなステップで踊り，それに固定的曲で神を迎える歌を歌う。迎えられる神はとても多く，神の名前はほとんどチベット語である。譬えば：

1　トグドズドュバ（ドズツォとも言う）；
2　ディロサロルブ；
3　ツカワツブ；
4　ダレサキズブ；
5　ナルガンキリ；
6　マバツギロドュ；
7　ミラルバドス；
8　ダバダユズノ；
9　バドュダンソキバ（ガマとも言う）；
10　ミナレバツブ；
11　ギュツェブバブ；
12　ドツガマバ；

13　カドウギュマ（女性である）；

14　セバレウギュマ；

15　ドズタンシベズ；

以上の神（菩薩）は演出の順番より並んだもので，百人以上の神さえ迎え，ここに主な神だけ例としてあげていた。

四，レバ踊りとトンバ踊り

トンバ踊と同様に，レバ踊りの種類も多い。両者の中には名前が同じものはいくつかあり，譬えば，龍が歩く踊り，象が歩く踊り，虎が歩く踊り，蛙の踊り，鹿の踊，大鵬神鳥の踊り，孔雀の踊り，ヤクの踊り，ししの踊り，馬の踊りら皆この種類に属する。また，両者ともナシ族の象形文字で書かれたことがあるが，今はトンバ踊りの舞譜（ツォムと言う）だけ完璧に保存してきて，レバ踊りの舞譜は文化大革命中になくされた。レバ踊りの伝承者の李文老の思い出によると，レバ踊りの舞譜は二冊あっ。1962年に和登之と言うトンバより新たな一冊を記録し，その内容は「テキスト」と「伴唱のルール」（歌詞も含む）に分けられるものであった。和登之氏はプオの時に亡った。その後，これは李文光氏より漢文に訳された。

ある人はレバ踊りとトンバ踊りは同一の類型に属す踊りだと指摘されたけど，比較によると，この見方はあまり正しくないようである。と言うのは，両者の名前が違い，両者の踊り姿も違うことである。又，両者とも宗教的踊りであるけど，トンバ踊りはただ祭祀の場しか踊らなく，レバ踊りのほうがもっと広い範囲で踊っていて，民間芸能だと考えても間違ないである。第三は，文化的内容から見ると，トンバ踊りとチベットボン教文化の間に明白は繋りがあり，トンバ踊りの舞譜に現れた神は皆トンバとボン教の神系に属する。けれども，レバ踊りなら早期的チベット仏教と関係深くて，その中に出てきた神は皆チベット仏教の菩薩ばかりである。チベットでは，紀元7世紀ごろに仏教がインドからチベットへ伝えてきて，仏教とボン教の間に長期間互い闘争しあい，融合しあいしたことがある。それを歴史的背景にして，ナシ族に保存し伝承しているレバ踊りとトンバ踊りの間に似ている部分が存在することはあたりまえであるが総体的に見ればトンバ踊りとレバ踊りは別別の踊りである。

五，レバ踊りとチベット仏教

塔城郷ナシ族の人々はレバ踊りがガマバが麗江に到着してから生まれた踊りだと考えている。昔，ナシ族の人々はほとんどガマバの名前を知っていた。ガマバはチベット仏教の一つの支系で，ガキョ派とも言う。1159年（南宋紹興二十九年）に，ガキョ派の僧侶のツキバはラサより六十キロ離れる西北地方のツブでず寺を建てて宣教を始めて，ガマガキョ，或ツブガマバと言う教派を創始した。この教派の活仏は元時代と明時代に朝廷より「国師」と「大宝法王」等の称号を授けてもらった。明時代以後，麗江県と維西県の境界には十三個のガマガキョ派のお寺を建てた。それに，チベットの大宝法王と青海省のデゲ寺の四宝法王とも前後にして麗江まで来て，その時の

ナシ族の土司の木氏より熱情的な穀待をもらった。俗にはこの十三個のお寺を紅教派のお寺だと考えていた。ガマガキョ派の活仏は今まで十七世代さえ伝承されたので，まことにチベット仏教の中の相當古い教派だと認められるが，ツォケバ（1357－1419年）よりチベット仏教を改革し，ゲル派の勢力が伸びつづけ，ガマガキョ派を排除してきて，ゲル派（黄教）の活仏のダライ五世（1617－1682年）の時には，ガマガキョ派は前チベットと語チベットで生存しにくくなて，数多くの僧侶は東チベットと麗江まで退けてきた。元時代と明時代に強い勢力を保っているナシ俗の支配者の木氏はガマガキョ派を保護する政策を打ち出して，ガマガキョ派は生き延された。

麗江県塔城郷隴巴村のナシ族出身のガマガキョ派僧侶のガマツディの紹介によると，レバ踊りはガマバ七世の時ミラというマガキュ派僧侶より伝わってきたものである。ガマツディは以下のような伝説を筆者に述べてくれた。ミラ大師はレバと言う弟子がおり，二人は若くして，一緒に修行してた。ある日，ミラ大師はひどい雹が天空から降ってくるに従って蜜蜂に変身して一つの牛の角に隠れたけど，弟子のレバはそんな法術がぜんぜんできないので，ひどい雹の害を忍ばなければならなかった。大い塊にする雹を避けるために，彼は絶えずに跳び跳びで，色色な身振りにした。この身振りは踊りになったのもんである。このようにして，災難を避けるのレバ踊りは彼から創始し，伝わってきた。しかし，後には黄教派（ゲル派）はこのような踊りを受け取らなくなったので，レバ踊りは仏教の僧侶に雲南ナシ族地方まで伝伝わってきた。

レバ踊りの起源に関しては今のナシ族の間には以上のような神話的解釈しかないが，神話と伝説は時時歴史の真実を訴えていてものである。踊る過程に存在するげいのうじんより神を迎えることや歌われる歌詞や，ガマガキョ派が麗江ナシ族地方での長期間の存在の歴史などを考えると，レバ踊りとチベット仏教のガマガキョ派との関係が確かに存在していると思っておる。

六，レバ踊りの文化意義及び価値

レバ踊りとガマガキョ派は歴史関係があるけど，ガマガキョ派のお寺で踊っている踊りとナシ族の民間で踊っているレバ踊りは違う。ガマディツ氏によると，お寺で踊った踊りはバツォと言って，やはりガマバから伝わってきたものである。レバ踊りの踊り手より神を迎えることはバツォより神を迎えることとほとんど同じであるが，両者の踊る方法は違う。又，経典の記述によると，大昔はトンバとラマ（チベット仏教の僧侶）は一つの者で，区別がなかった。後になってから，両者の区別が出てきて，別別に自らの経典を読み始めた。それにそれぞれの踊りを踊り始めた。ガマディツ氏は一気に十七世紀のガマバの名前が今まで暗誦ができて，それに各世代について詳しく解説できる。彼は最初の三世代はドズツォ，ディロバ，ナルバと別別に名前を取って，みんなインドの出身で，仏教をチベットまで伝えてこなかった時代の人だと指摘した。

この前，ある人はナシ族のレバ踊りはチベット族のルバ踊りだとも指摘された。もちろん，この二種類の踊りの間には歴史的関係が存在すべきが，チベット族のルバ踊りはずっと前からわずかな遊吟芸能人より伝承する踊りとなったので，チベット族の地域のルバの踊はナシ族地方のレバ踊りの数多い踊りの種類と大規模な場面があまり見えない。昔はチベット族の遊吟芸能人もよ

く麗江県塔城郷等ナシ族地方にきたが，ナシ族の人々は彼らを「ハメルバツォ」と呼んで，「こじきガルバ踊る」との意味である。塔城あたりのナシ族の記憶の中にはチベット族の芸能人より踊ったものと自分より踊ったものは同じわけではないよう。

ナシ族のレバ踊りにせよ，バツォとトンバ踊りにせよ，チベット族のルバ踊り，ゲト踊り（雲南省迪慶州帰化寺に保存している，この踊りはナシ族の僧侶が踊るバツォと大体同じである）にせよ，いずれにしても宗教における神を祭祀する踊りに属しているが，あるものは民間に保存していて，あるものはお寺に伝承している限り，また地域と民族の格差があるので，それらの踊りは次第に外見から中身まで獨立性がある踊りになった。それらのもっともっと古老の元を遡ると，みな古い時代のインド宗教及び踊りと顕著な文化関係が存在している。

古代には，宗教的踊りはインドで盛んに生きていたよう，長い間，宗教的踊りは民間にもよくはやって，全民的な信仰と踊りとなった。このことはチベットや，雲南や，四川などのチベット仏教の伝承地に対しては影響が強くて広かった。レバ踊りを踊る時には必ずインド起源の神を迎え，インド人見たいの「アンツライ」と言う役者が出てき，歌われる曲もインド音楽の特徴が帯びえているとガマディと李文義氏も指摘されてた。ここから見ても，レバ踊りとインド文化との間には深い関係があることは明らかである。

中国の各民族においては元元から自民族の間に生れて伝わってきた踊りと外部から伝わってきた踊りの特徴はよく違っている。譬えばナシ族のトンバ踊りや，「バツォ」と民間の踊りとする「オゼゼ」，「ツツォ」とはまったく違う踊りである。レバ踊りは別で，神を祭祀する踊りであるし，また世俗ぽいで，金民的な踊りでも言える。この点はインドの踊りとよく似ている。したって，われわれはレバ踊りと言うものはインド仏教に伴って，チベットを経由し，最後に麗江県まで伝わってきたインドの古い踊りだと推測できる。今までインドは宗教信仰がよく盛んに存在している所である。けれども，九世紀の後にはイスランム教が伝わってきて，古い時代の仏教信仰とインド教信仰と共に生れた踊りは次第に完全な面目が失なって行て，残念なことになった。以上の推測が成立できれば，われわれは次ぎの結論をまとめられるだろう。即ちわれわれは完全に保存しているナシ族のレバ踊りからインド文化とその踊りの古い面目を見られるだろう。いまだには筆者がインド文化とその踊りに関する研究は不足なので，レバ踊りとインド踊りとの比較することはまた困難であるが，以上の紹介と論述を綜じるならば，ナシ族より完全に保存しているレバ踊りは中華民族の珍しい文化財であるし，また東方文化の一つの特異な花と言っても言えすきないだろう。

（中国社会科学院民族文学研究所，白庚勝，翻訳）